

【最優秀賞】 賢明女子学院中学校・高等学校（兵庫県）

中高生の私たちが世界のためにできること

～^{いま}現在から^{ここ}賢明から笑顔をお届け～

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

カトリック姫路教会、妙円寺、景福寺、白國神社、網干保育園、網干小学校、増位小学校、谷内小学校、加古川小学校、広畑小学校、広畑保育園、（株）ヤマサ蒲鉾、（株）浜田運送、PTA、朝日新聞、神戸新聞

【活動のねらい】

最終目標は「難民の子どもたちにより多くの笑顔をお届けること」。
中高生の自分たちが出来ることを、自ら考え、多くの人を巻き込みながら実践する。
世界で起きている問題を自分ごととして捉える。

【活動内容】

① 生徒主体の会議運営

2020年度、プロジェクトに取り組んだ際には、校内で661枚の服を回収。

中高一貫の本校では、集められる数に限りがあると実感。

2021年度は近隣の保育園・小学校をはじめ、子ども連れの方が訪れそうな場所（図書館や美術館、お店など）約30か所に協力依頼のお手紙を作成。その後、電話でアポイントをとり、13施設を訪問し、チラシ・ポスター掲示、回収箱を設置し回収を行った。

担当は中学生・高校生ができるだけペアになるようにし、高校生が中学生に教え活動できるようにする。という工夫も行った。カトリックの学校であるという特色を生かし、教会やお寺、神社などにも積極的に協力を依頼し、快くご協力いただいた。

② 職場体験を通して、「限りある資源に向き合う姿勢」を学ぶ

出張授業の後、「服の持つ力についてもっと学びたい」と意欲を強めた生徒が多く、ユニクロピオレ姫路店で職場体験をさせていただき、スタッフの方々から「限りある資源にいかに向き合うか」など人としてあるべき姿勢を学んだ。

③ 小学校で出張授業を実施→小中高の連携により、学びを深める体験に

近隣小学校からの要望を受け、2校で出張授業を実施し、難民問題に関するクイズと動画を作成し、小学生と共に身近な問題から世界の難民について考えた。協力学校からは合計1263枚の子ども服を回収できた。

【成果】

生徒たちは活動を通して多くの方の善意に触れ、コロナ禍で校外の方との交流が持ちにくい中、プロジェクトを通して多くの人々と繋がることで、「社会の一員としての自分」を実感した。

校内では昨年度の約3倍にあたる1,898枚、校外では3,972枚、総計5,870枚の子ども服を回収することができた。

学年：中学2～3年・高校1～2年

人数：17名

活動の枠組み：その他特別活動

（Be Leadersというリーダー育成プロジェクトの一環。
中1～高2の有志50名弱が所属し、課外活動としてSDGsに関する活動を行う。8つの班に分かれ、今回は「ユニクロ班」（17名が所属）が中心に活動。）



活動の中心となった17名以外にも、服並べに多くの生徒が協力してくれた。



協力先を訪れ、感謝の気持ちをお伝えするとともに、服を回収。
人と人の繋がりがや人の温かさを実感した活動になった。

【優秀賞】池田市立ほそごう学園（大阪府）

世界中の難民の子どもたちに服を届けよう

～昨年よりもたくさんの人に難民のことを知ってもらい、たくさんの服を集めよう～

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

ほそごう学園全児童生徒・保護者・細河保育園・友星幼稚園・古江台保育所・伏尾台保育所・細河コミュニティみどりの郷・伏尾台コミュニティプラザ・阪急バス伏尾台営業所・古江台ホール（高齢者介護施設）ハートフル伏尾（高齢者介護施設）朝日新聞社・読売新聞社・池田市広報課・GU箕面キューズモール店

【活動のねらい】

1) ねらいと大事にしたこと

今年度のねらいは、昨年度の活動経験や反省を生かし、難民問題解決のためにより主体的に自ら考え工夫し行動すること。学年の目標は「昨年よりもたくさんの服を集めよう！」に決定した。

活動するにあたって大事にしたのが以下の二つである。

- ①服を届ける必要性を理解し、自分の暮らしや生活と重ね合わせて、難民問題を自分ごととして受け止めること。
- ②皆で力を合わせれば大きな力となり社会や世界を変えられることを実感すること。

2) 活動内容の実際

昨年の反省を生かし、5つの班に分かれて活動を行った。

- ①SNS・マスコミ広報班(学校HPの記事作り・新聞社への取材依頼と対応)
- ②校内広報班(各教室や保護者へのチラシや呼びかけ)
- ③校外広報班(校区内の施設や事業所回への回収ボックスの設置やポスター掲示の依頼。地域の掲示板や、阪急バスにポスターを掲示し、GU箕面キューズモール店にも回収ボックスを設置)
- ④動画作成班(学校HPの掲載や動画の作成)
- ⑤回収班(回収ボックスの作成、設置、回収作業。校内外8か所に設置するためのボックスを作成)

3) SDGsや難民問題を自分ごとにするために

つくる責任つかう責任というSDGs12番目の目標について考え消費活動をふりかえるため、映画「ザ・トゥルー・コスト」を教材に大量生産大量消費が生み出す問題について学び、ユニクロ・GUのように企業がサステナブルな生産活動をする意義やそういった商品を購入する大切さを学ぶための授業を行った。

4) 成果と課題

校外に呼び掛けたこと、新聞やSNSに記事が掲載されたことが大きかった。記事を読んだと20名以上の方から服が届けられ、活動への賛同や子どもたちへの激励手紙を同封してくださる方もあり、子どもたちのモチベーションも高まり大きな自信につながった。

自らの手の中の服が、ファーストリテイリング社を通してUNHCRに届き、難民キャンプの子どもたちに届けられるという実感は何よりの教材だと感じている。

学年：義務教育学校8年生（中2）

人数：57名

活動の枠組み：総合的な学習の時間

本学園では総合的な学習の時間に「人権総合学習」にとりこんでいる。自分のくらし、地域、社会の課題をみつめ、課題解決のために活動するという探究型の学習を人権教育の視点をもって進めている。



朝日新聞と読売新聞に記事が掲載された



昨年の1562枚の4倍以上の6817枚の子ども服を回収

【優秀賞】さいたま市立美園南中学校（埼玉県）

「小さな力が支える世界」

ただ服を集めるのではなく、どう活動をすれば、より世界を支えられるのか

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

学区内の美園小学校、大門小学校、学生団体SOARによる、難民についてのワークショップ実施

【活動のねらい】

「小さな力が世界を支えることへの気づき」

「実践を今後さらなる社会貢献へつなげていく」

【活動内容・成果】

○生徒に起きた異変

出張授業前は単純に服を集めるという程度の認識だったが、出張授業を受けて、この企画は世界を支えることにつながると肌で感じ、子どもたちの意識に異変を起こした。

○世界を支える会議とプラン作成

夏休みの部活動で合計6時間にわたる会議を実施し、世界を支えるための具体的プランを作成した。

一つ目は学びを深めること。服と難民について、より学ぶことが必要と考えた。

二つ目は服集めの宣伝方法。

三つ目は学校外との連携。コロナ禍のため、無理ない範囲で同じ学区内の小学校に協力依頼することを決めた。

また、難民について学びを深めるため学生団体「SOAR」（難民に関する出張授業を行う団体）へワークショップの依頼を決定した。

○深める学び ZOOMによるワークショップ

8月：「SOAR」による、オンラインワークショップを実施。

大切な物だけでなく、国籍、学歴、命にも代えられないような大切な人やモノを失う難民の辛い立場を強く実感できた。

○思いをぶつけた子ども主催の講習会

9月：企画の趣旨と、深めた学習内容を朝礼の時間を利用して子どもたちが校内放送で実施。

服のチカラ。服のロス。難民の問題。6月から学び、感じ、考えたことを真剣に全校生徒にぶつけた。

10月：は学区内の小学校にも企画の趣旨の説明と、ポスター掲示やチラシ配布を子どもたちが依頼した。

○最終的に集まった3939枚のチカラ。60人に広がったチカラ

11月：たくさんの学んだことや思いを広げた結果、3939枚という予想を超える服のチカラが集結した。

他の部や委員会に協力を依頼し、作業人数が60名に増え、快く協力してくれたのも大きな喜びで、パートナーシップの大切さも体感できた。

○世界を支える達成感から次のステップへ

世界を支えることができますか？と問われれば、ほとんどの子どもたちは無理と答えるだろう。

しかし、今回の企画を実行し、活動を終えた今、無理とは答えない。

「やればできる」「人の協力は広がる」「小さなチカラが世界を支える」そんなことを子どもたちは身をもって学ぶことができた。

なんて素晴らしい機会をいただいたことだろう。

しかし、子どもたちの計画は、これが始まりだ。今回の体験を終えた今、次のステップへ目を向ける。

一回り成長した子どもたちが次にどのようなステップを踏んでいくのか楽しみにしたい。

学年：中学1～3年

人数：60名

活動の枠組み：生徒会・部活動

中心はSSTC部。社会を支える活動をしていこうと、今年度リニューアルした部活



トータル6時間をかけて、どうすれば世界を支えるために意義ある活動ができるか真剣に話し合った



生徒が校内放送で全校生徒へ行った講話原稿

【優秀賞】 町田市立小中一貫ゆくのき学園大戸小学校（東京都）

単元名「TUNAGARI」

自分たちは目に見えない糸で地域や国際社会とつながっている

学年：小学校6年生

人数：29名

活動の枠組み：総合的な学習の時間

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

ゆくのき学園（大戸小学校・武蔵岡中学校）、相原幼稚園、クローバー保育園、6年生の保護者、ウエルシア（町田相原店）、大戸地区自治会、武蔵岡団地自治会、地域の方々

【活動のねらい】

自分たちは様々な人やものとつながっている。

（他学年、職員、保護者、地域、国際社会など）服のチカラプロジェクトを柱として、そのことに気づき、自己の生き方について考える機会とする。

【活動内容】 活動は大きく次の①～③の領域に分けて進めた。（それぞれがつながり合っている）

①「畑づくり・野菜づくり・無人販売」

荒地を整備し畑を作る。そこで育てた野菜を販売。場所は地域（ウエルシア薬局様）の敷地をお借りして、無人販売で行った。販売収益は、服のチカラプロジェクトに協力してくれた方々への、お礼の品を作る際に発生する材料費として使用。（紐、水性ニス、蜜蝋ワックス、ネジ、ビーズなど）

②「お礼の品づくり～里山の木を生かして～」

自校の敷地内にある里山の木を間伐。その木材を使ってストラップや箸置きを作り、お礼の品として服を寄付してくれた人たちへ渡した。

③「服のチカラプロジェクト～宣伝と回収～」

宣伝はパソコンのプレゼン機能を活用し、資料を作成。ポスター作りでは、温かさを重視した手書きのものと、大量印刷が可能なデジタル作成のものを分担して作った。

目を引く工夫として、背景と文字の色、シンプルなデザイン、端的なキャッチコピーなどを意識して作った。

回収した服の中には手紙が入っていることもあった。

一部抜粋：「とても素敵な取り組みに感心、共感しました。思い出のある服ですが、どなたかの役に立てると思うとうれしいです。」

みんなで感謝の気持ちをこめて丁寧にたたみ、箱詰め作業を行った。

【課題】

初めての取り組みだったこともあり、お礼の品作りでは、服を寄付してくれる人数が予測しにくく、多めに作ってしまい、残ってしまう返礼品もあった。

【成果】

自分たちの行っていた、野菜作りや、木材加工、服集めはすべて一つのつながりをもった学習であることや、自分たちの活動が地域との絆を深めるきっかけになったり、世界で困っている人たちの役に立つ働きだったことを感じる事ができた。



学校で育てた野菜を無人販売

里山の木を間伐し、その木材を使ってストラップや箸置きに加工。中学校の技術室を使うことができるのは小中一貫校の強み。紐やビーズ、ニス等は、野菜販売の収益で購入。



寄付してくれた人たちに、感謝の印として作成したストラップや箸置きを渡した。

【UNHCR特別賞】 横浜女学院中学校高等学校（神奈川県）

Think Globally, Act Locally ～人と人をつなげよう～

学年：高校1年

人数：10名

活動の枠組み：高1 ESD活動

【活動に関わった学校内外の組織や団体】

横浜学院幼稚園 UNHCR協会

【活動のねらい】

このプロジェクトへの参加の回数を重ねるごとに、校内での服の回収だけでなく、「広く地域の人たちにSDGsを広めていきたい」という思いが強くなってきた。本校はSGHネットワーク校であり、中1から高2まで全学年週に1時間ESD活動(ESDタイム)の時間を設けている。高1の学年テーマが「Think Globally, Act Locally」であり、長年地域の国際協力フェスタなどに参加してきたが、コロナの影響で昨年・今年とイベントは中止。そこで今年は店舗と協力して、ひろく来客者にSDGsをアピールすることを目標とした。

【活動内容】

「私たちにできること」の具体的活動目標として「人と人をつなげる」ということを設定。

○「つなげる」第1弾

「伊勢佐木町GU店の大野店長×UNHCR協会天沼さん×横浜女学院高1生徒108名」を試みた。大野店長からプロジェクトの説明を受け、そのバトンを天沼さんが取り、難民の人たちの現状をお話してくださった。

○「つなげる」第2弾 「伊勢佐木町GU店での店頭活動」

①服のチカラプロジェクトをアピールするポスターをつくり来客者に説明

②SDGsアンケート「どのゴールに興味がありますか？」ときいて、SDGsポスターにシールを貼っていただく。

今回は学年108名での活動なので、伊勢佐木町だけではなく元町の協力も得てこのSDGsアンケートを行い、20店舗の協力を得られ、その店舗の取り組むSDGsを生徒が取材・アピールポスターを制作・店頭活動としてアピールポスターとSDGsアンケートまた募金活動を行った。

○SDGsアンケート回答数1546人

【1位 223票 海の豊かさを守ろう / 2位 179票 貧困をなくそう / 3位 128票 すべての人に健康と福祉を】となった。

【課題】

国内にいる難民の方とつながること。近隣には多くの外国につながる人たちがいるので、その人たちに服をとどけたり、交流会を開いたり、ボランティアができないか検討していきたい。

【成果】

今回の活動報告会の発表の中での生徒のコメントには「SDGsを知らない人が結構いるのに驚いた」「もっとSDGsを学びたいと思った」など、自発的に学んでいきたいという意識が生まれたことが大きな収穫であったと思う。

募金活動では27万1402円という額が集まった。生徒たちが「人と人をつなげる」ことを通して得たチカラである。

自分たちにできることは、「服を回収すること」だけでなく、そのような活動をひろく人に伝えること、また今現在私たちが考えていかななくてはいけないSDGsのことを伝えていくことがこれだけのチカラをうみだすことを実感した。

『学校×企業×国際機関・NGO×街の人たち』このつながりを生み出したことに今回の活動の成果はおおいにあったと実感している。



本校にて
GU伊勢佐木町店長大野さん
×UNHCR協会天沼さん
×高1ESD共生チームのメンバー



伊勢佐木町GU店にて「服のチカラPRポスター」と「SDGsアンケート」